「タイガーマスク」現象に思う

漫画「タイガーマスク」の養護施設で育った主人公「伊達直人」名などで、暮れの２５日のクリスマスから養護施設へのランドセルやお金などのプレゼントが相次ぎ、１月１２日現在で全国の全ての４７都道府県に広がり３２１件との報道。

暗いニュースの続く閉塞感の世相の中で、こうした善意の模倣の広がりは、新春に相応しく何とも心温まるニュースである。
児童福祉施設の現状からいえば、措置費として「入進学支度金」が支給されるが額が十分とはいえないだけに、現場は嬉しいことに違いない。
この「タイガーマスク」現象が一時的なものでなく、持続することを願う。

さて一方、年明けに１８才になり養護施設を出なければならなかった若者たちを取材した「ずっと家族がほしかった～親なき子たち　１年の記録～」のドキュメント番組があった。

養護施設で育ったある女性が、共に悲しみ共に喜んでくれる家族の居ない寂しさの体験から、同じ境遇の若者たちが集い、互いに支え合う NPO サロンを 4 年前に立ち上げ、そこに集う若者を追った番組であった。

養護施設を退所し社会に出て自立を促されても、アパートを借るにも就職するにも家族の保証人がいないことから拒否される若者たちの前に立ちはだかる社会の高い壁。
そうした現実に向かい合いながらも、マンションの一室に養護施設出身の若者たちが集まって一緒に食事をし、就職や住まいなど様々な相談に乗っている。
虐待に加え社会の差別や偏見を経験してきた若者たちにとって、サロンの仲間だけが気持ちを分かち合える大切な「家族」ということのよう。

こうした若者たちの現実を知ると、ランドセルやお金などの支援も有り難いが、やはり若者たちの現実の問題に寄り添い改善に向かう社会に、何とかならないものかと思わざるを得ない。
例えば、善意ある個人が若者たち個々をよく知らない段階で直ぐに保証人になることも難しいだろうから、措置権者であった行政機関の長が養護施設を退所する若者たちの退所直ぐの保証人になるシステムは作れないものなのだろうか。

恐らく若者たちは、後輩たちへの金品の支援もさることながら、社会の誰もが今からでもなれる理解ある心から寄り添ってくれる支援（「家族」）を、より強く願っているのではないだろうか。

この度の「タイガーマスク」現象について、ご意見をお聞かせいただければ幸いです。

阿部幸泰　　（2011 年 1 月 14 日　記）